演題番号：B10

分娩による死廃事故が増加した管内2酪農場における初産牛への分娩誘起実施効果

○石原竜之介

NOSAI ひょうご 丹波家畜診療所

1. はじめに：管内 2 酪農場で 2022 年に初産牛の分娩による死廃事故が増加した。そこで、2023 年から分娩事故を低減させることを目的として分娩誘起を実施した。また、2019 年から 2023 年までの分娩事故発生状況について調査し、分娩誘起が分娩後の繁殖成績に及ぼす影響について検討した。

2. 材料および方法：A 農場（搾乳牛 109 頭）および B 農場（搾乳牛 56 頭）において調査した。分娩誘起はプロスタグランジン $F_2\alpha$ 製剤単独またはプロスタグランジン $F_2\alpha$ 製剤と副腎皮質ホルモン製剤の併用とした。(1) 2019 年 1 月から 2023 年 12 月までの 5 年間に出産した初産牛を調査対象とした。調査項目は死産発生率、分娩後の母牛死廃事故発生率ならびに分娩時の胎齢とした。(2) 2023 年 1 月から 12 月に分娩した初産牛 58 頭のうち、分娩誘起を実施した 27 頭を処置群とし、実施していない 31 頭を無処置群とした。調査項目は分娩後平均初回人工授精（AI）日数および空胎日数とした。

3. 結　果：(1) 2019 年から 2023 年までの 5 年間の死産発生率は 0.0%、6.4%、2.1%、9.5%、0.0%であった。母牛死廃事故発生率は 2019 年から順に 0.0%、2.1%、2.1%、11.9%、3.4%であった。胎齢が 290 日を超えて分娩した牛の割合は 2019 年から順に 0.0%、0.0%、2.3%、9.5%、0.0%であった。(2) 2023 年における平均初回 AI 日数は処置群 97.2 ± 34.7 日であり、無処置群 118.5 ± 32.9 日であった。平均空胎日数は、処置群 106.3 ± 25.6 日であり、無処置群 165.5 ± 64.4 日であった。初回 AI 日数、空胎日数ともに処置群が無処置群に対して有意に短縮した。

4. 考察および結語：2022 年は 2021 年までと比べ胎齢が延長したことで過大子となり分娩事故が増えたと考えられた。2023 年は分娩誘起を実施したことで過大子になるのを防ぐことができた。加えて、2023 年は分娩誘起を行ったことで分娩までのおおよその時間を予測可能になり、畜主が分娩に立ち会う機会が増え、適切な介助により分娩事故を減らせたと考えられる。また、初回 AI 日数および空胎日数が短縮し、繁殖成績の向上にもつながった。以上により、初産牛の分娩事故が多い農場では、分娩誘起は死廃事故を低減し、繁殖成績の向上に寄与すると考えられる。